

## 証円上人秀源の活動にみる醍醐寺と泉涌寺の交流

高橋 慎一朗

はじめに

真言宗醍醐派総本山の醍醐寺と、真言宗泉涌寺派総本山の泉涌寺は、ともに京都市南部に存在し、多くの文化財を有する真言宗の大寺院である。共通点の多い両寺院であるが、意外にも相互の関係については、特に注目されてこなかった。その背景には、そもそも泉涌寺が、中世・近世においては、醍醐寺のように真言をもっぱら修学・伝授する寺院ではなく、律を中心に天台(浄土)・真言・禪を合わせ学ぶ四宗兼学の寺院であって、明治時代になって四宗兼学を廃止し真言宗を選択したという事情があると思われる。

もちろん、中・近世の泉涌寺が真言密教と全く関係がなかったわけではない。泉涌寺開山の俊苾(一一六六―一二二七)<sup>(1)</sup>にしても、若き日には、肥後で高野山系の真言を学んでいる。泉涌寺は、建保六年(一二一八)に宇都宮信房から俊苾に寺地が寄進されたことから創建事業が開始されるが、その直後に俊苾が著した『造泉涌寺勸進疏』や『泉涌寺殿堂房寮色目』には、建立が計画されている施設の一つとして「真言院」があげられていた。また、鎌倉末期には泉涌寺に「灌頂堂」が存在していたことが『称名寺聖教』(金沢文庫保管)によって確認される(元亨四年「泉涌寺灌頂堂図」)。南北朝期ごろ作成の『東山泉涌律寺図』(泉涌寺蔵)

にも、伽藍の東南に灌頂堂が描き込まれている<sup>(2)</sup>。したがって、泉涌寺内で真言の修学や伝授が創建当初から行われていたことは確かである。ただし、俊苾や創建直後の泉涌寺と醍醐寺の間には、直接の関係は認められないのである。

以上より、中世・近世の醍醐寺と泉涌寺には親しい交流はなかったと、従来は見られていた。しかしながら、醍醐寺所蔵の文書・聖教の中には、泉涌寺に関連する人物の記述が、数多く含まれていることがわかった。とりわけ、最近の研究では、醍醐寺と泉涌寺を結ぶ重要な存在として、戦国時代の長典という僧が注目を集めている<sup>(3)</sup>。長典は、泉涌寺の律僧でありながら醍醐寺理性院や三宝院の法流を相承し、浄土も兼学するなどの多彩な活動をおこなった興味深い人物である。

さらに、醍醐寺と泉涌寺の交流を裏付ける人物として、鎌倉後期の活躍した秀源という僧の存在が浮かび上がってきた。本稿では、従来注目されてこなかった秀源という僧の活動の痕跡を追うことを通じて、中世における醍醐寺と泉涌寺の交流の実態を明らかにしたい。

## 一 醍醐寺と秀源

『醍醐寺聖教』の中には、奥書に秀源という僧侶が登場するものが、かなり多く含まれている。このことより、秀源と醍醐寺が密接に関係し

(1) 証円上人秀源の活動にみる醍醐寺と泉涌寺の交流(高橋)

ていることは容易に想像できるが、両者の関係を端的に述べた史料が存在する。すなわち、『醍醐寺聖教』三〇一函七一号（以下、『醍』三〇一―七一、のよう略す）の「三寶院重事相承口決」という聖教の奥書に、次のように記されている。

右、諸師之口説ハ秀源上人以自筆令拝写訖、／本紙ハ水本ノ経庫ニ納、此秀源者、当院／祖師文海法印ノ師主也、行樹院元祖俊円／法印ノ弟子也、自筆之聖教此外多ク伝領、／多分水本経庫ニ納、往々可拝見、不可他言深々、／寛政十二（庚申）八月六日、金剛資淳寛（／は改行を、／は割書を示す）

これによれば、秀源は上醍醐・行樹院の開祖である俊円の弟子で、同じ上醍醐・宝幢院の文海の師匠であるという。また、秀源が自筆の聖教を多数残し、それが水本（釈迦院の通称。報恩院の上醍醐における拠点でもある）の経蔵に納められていたことがわかる。

右により、秀源が醍醐寺の真言を学んだ僧であることは明らかである。「伝法灌頂師資相承血脉」（『醍』一〇三一―一四）<sup>(4)</sup>によっても、秀源が醍醐寺の金剛王院流の法流に連なっていたことがわかる。同史料の記載を基に、流祖・聖賢から秀源へ至る金剛王院流の法流を示してみると、次のようになる。

聖賢―源運―雅西―真源―実西―実雅―俊円―秀源

とりわけ、雅西以降の流れは、雅西が上醍醐・照阿院の開祖であったことから、「照阿院流」と称されていた（『野沢血脉集』第二）。

『醍醐寺聖教』の奥書に見える書写年代と秀源の年齢から逆算して（『醍』一五四―一八、二七四―七など）、秀源は文永三年（一二六六）の生まれということになる。彼の真言聖教の書写活動が確かめられるのは、管見の限りでは永仁元年（一二九三）、二十六歳の時からである。醍醐寺聖教の「諸尊道場観石山記 上・下」（『醍』一七二―九―一・二）と

『東寺観智院金剛藏聖教』のなかの「無常導師作法」（二四五箱二五号）がそれにあたるが、いずれも書写の場所は不明である。

次に、秀源の醍醐寺における書写活動を、聖教奥書によって年代順に追ってみよう。

・永仁三年（一二九五）二月六日、行樹分（坊）にて、「胎疏并儀軌等序要文」を書写（『東寺観智院金剛藏聖教』一七二箱二二号（五））。  
・永仁三年（一二九五）二月十九日、行樹坊にて、「愛染法抄」を書写（『醍』四一〇―二四）。  
・永仁六年（一二九八）四月二十三日、醍醐寂靜院にて、「某修法次第断簡」を書写（『醍』五五五―四二一）。  
・正安二年（一三〇一）三月十八日、行樹坊にて「三寶院伝法灌頂私記」を書写（『醍』四二四―一九）。

この後は、奥書等からは醍醐寺での秀源の活動を追うことはできない。近世成立の「小田原証円上人秀源血脉」（『醍』五〇九―三一―一）は照阿院流の血脉であるが、これによれば秀源は「正安三年辛丑三月廿日、於醍醐山、随俊円法印、受当流極位」ということである。正安三年（一三〇三）に行樹院俊円から伝法灌頂を受けた秀源は、この時点でいったん醍醐を「卒業」し、上醍醐を離れたのではないかと考えられる。

なお、右の奥書に記された書写場所のうち、「行樹坊」とは、秀源の師匠である俊円の房名であり、俊円を開祖とする上醍醐の行樹院のことである。「寂靜院」については詳細不明であるが、俊円と秀源が連なる照阿院流（金剛王院流）の祖師の一人・越前阿闍梨真源の住房と見られる（『伝法灌頂師資相承血脉』）。また、上醍醐には寂靜院谷という名の谷があり、行樹院や照阿院もこの谷に存したことから、寂靜院は、照阿院流とは縁が深く行樹院の近隣に存した院家と思われる。あるいは、寂靜院の後身が行樹院であったかもしれない。

このほか、永仁三年（一二九五）二月十六日書写の奥書がある「愛染法」（『醍』三四七―一九）の表紙に「照阿院 金剛仏子秀源」とあり、書写の日付の近い「愛染法抄」（『醍』四一〇―二四）の例から類推して、これもまた秀源が行樹院で書写したものと考えられる。

以上より、若いころの秀源は、上醍醐の俊円のもとで真言密教を学び、行樹院とその周辺で聖教の書写に勤しんだのち、最終的に受法を遂げたものとみなされる。

秀源の醍醐寺における活動が、再び聖教類で確かめられるのは、しばらくの時間を経てからのことである。特に注目されるのは、延元元年（一三三六）四月二十九日に秀源から静舜へ伝法灌頂が行われていることである（「秀源授静舜伝法灌頂印信紹文」『醍』一〇三一―四七）。醍醐の法流を後継に伝えることを積極的におこない始めたのである。この時、秀源は七十一歳であった。

秀源は、これにやや先がける同年（建武三年）二月十三日にも、「祖師」（照阿院流の祖）雅西の自筆聖教を書写し、「丈六堂常住」として永く保持せよと書き置いている（『秘鈔断簡』『醍』四七七―三三三）。この丈六堂とは、上醍醐の丈六堂のことと思われる。また、少し前の元徳二年（一三三〇）、秀源は上醍醐清瀧宮遷座に際して、「奉行僧」として遷座の記録を書き残している（『醍醐寺新要録 山上清瀧宮篇』<sup>7</sup>）。以上より、一三三〇年代、およそ晩年にあたるころ、秀源は再び上醍醐で活動していたことがわかるのである。

そして、この一三三六年以降に彼の動向を伝える史料は見当たらないことから、ほどなく没したのではないかと考えられる。「小田原証円上人秀源血脈」には、「秀源ハ曆応元年、七十三年也」と記されており、これは秀源が曆応元年（一三三八）に七十三歳で没したことを表していると思われる。

ところで、秀源が法を伝えた静舜は、「山上山下住侶院務次第」（『醍』五八―二四四）の「龍光院々務」の項によれば、上醍醐・中谷の理趣坊（龍光院）の院主となる人物で、「康永ノ比」の人であった。また、同史料によれば、静舜の前の院主は、静演という人物で、「理趣坊大夫僧都」と称し、「永仁ノ比」の人とされている。実は、この静演もまた、秀源書写の聖教をしばしば書写しており（『醍』一五四―八、二七三―四など）、「三宝院大事聞書」（『醍』七九―一九〇―一三）には「正和四年（一三一五）五月廿八日、静演僧都云、自証円房（秀源）、伝一簡大事」とある。したがって、静演も秀源の弟子であったとみられる。

「伝法灌頂師資相承血脈」には、秀源の法流を受けた人物として常陸大僧都親海（大慈院と号し、後に東寺長者に補される）のみが記されているが、右にあげた上醍醐の静舜・静演を伝法の弟子に加えることができ、さらに、先に見たように文海も秀源の弟子であった。文海は上醍醐・宝幢院の院主で、文和四年（一三五五）四月七日に没しており、「学頭」「法印」とされる（『円明院・戒光院・宝幢院・行樹院院務記』『醍』一三一―二四）。また、「小田原証円上人秀源血脈」には、秀源弟子として、親海・文海のほかに「兵部卿阿闍梨弘仲」をあげている。

年月日未詳の「天慶布字印信相承次第」（『醍』八〇―二）という史料によれば、「宝幢院法印文海」は、「普門院上人秀源」から天慶布字印信を相承していることがわかる。<sup>8</sup>『東寺王代記』応永十七年（一四一〇）六月五日条に「戌刻上醍醐普門院炎上」（『大日本史料 第七編之十四』二頁）とあることから、この普門院とは、上醍醐の院であったと考えられる。

また、貞和三年三月十一日権少僧都弘仲置文（『醍』一五一―三三。『大日本古文书 醍醐寺文書之十』二三三五号）によれば、聖賢・源運・雅西・真源・実西ら金剛王院流（照阿院流）の代々祖師の著述物で、散在

させてはならない重要書目については、「証円上人普門院聖教」の事と一緒に、証円上人の置文に載せられているという<sup>9)</sup>。

この置文の作成者・弘仲は秀源の弟子であり、のちに詳しく触れるように「証円上人」とは秀源のことである。したがって、上醍醐の普門院には、秀源の収集・書写した聖教類がまとめて残されていた可能性がある。また、秀源が元亨元年（一二三二）に書写した「調支分作法」（『醍四〇六一六二』）が、「可為普門院聖教之内」とされていることも、その可能性を裏付けるものである。あるいは、晩年の秀源の、上醍醐における活動拠点が普門院であったかもしれない。

ちなみに、近世初頭成立の義演編『醍醐寺新要録 上諸院部』においては、「普門院篇」は、編目のみで本文がなく、近世初頭までには普門院は廃絶してしまったと思われる。ただし、寛永二年（一六二五）の「醍醐寺寺領目録案」（『醍五―一六三』、『大日本古文书 醍醐寺文书之三』六二九）では、「山上諸御門跡分」として「普門院御門跡」百石が計上されており、かろうじて名跡のみは継承されていたようである。もっとも、この百石も、良音以下四名の上醍醐の堂衆もしくは承仕と思われる者たちの取分として分配されており、近世初頭には既に普門院の実態は無くなっていったという点は変わらない。

なお、嘉元元年（一一三〇）に泉涌寺知客寮で秀源が書写した「秘密集 下」を、弟子の文海が書写し、さらに永祿五年（一五六二）に玄純房が上醍醐中谷で書写し、最終的には智積院に伝来している（『智積院新文庫聖教』四三函四四号）<sup>10)</sup>。この「上醍醐中谷」も普門院を指す可能性があるが、中谷にあり、秀源の弟子静演・静舜が院主を務めた龍光院の可能性もある。いずれにせよ、秀源書写の聖教が上醍醐で相承され、智積院にまで伝播しているのである。

以上みてきたように、秀源は、鎌倉後期から南北朝期にかけての醍醐

寺、とりわけ上醍醐において聖教の書写や集積などの活動を精力的におこない、金剛王院流を中心とする醍醐系の真言教学の相承に寄与した人物であったことがわかった。

## 二 泉涌寺と秀源

「伝法灌頂師資相承血脈」（『醍一〇三一―一四』）によれば、秀源は「小田原証円上人」と呼ばれていたことがわかる。「上人」という通称からは、秀源が、僧位僧官を得て公的な修法・法会に参加していたような僧侶ではなく、各地をめぐって活動するような遁世の僧侶であったと推測される。

果たして、醍醐寺聖教の奥書などからは、秀源が律の一大拠点であった泉涌寺においても聖教書写を頻繁におこなっていたことが確かめられるのである。以下、その活動の足跡を追ってみよう。

・正安元年（一二九九）六月十二日、泉涌寺にて、一円上人（八坂上人・賢爾）の本を以って「許可作法次第」を書写（『真福寺善本目録』）。

・正安三年（一一三〇）十一月十四日、泉涌寺にて、同寺七世長老の覚一（覚阿）の本を賜って「三宝院伝法灌頂私記」を校合（『醍一四五―一八』）。

・正安三年（一一三〇）十一月十四日、泉涌寺にて、覚一の本を賜って「具支灌頂式血脈」を校合（『醍二九六―九五』）。

・正安三年（一一三〇）十一月十四日、泉涌寺にて、覚一の本を賜って「治承記 全」を校合（『醍六九七―一二』）。

・正安四年（一一三〇）四月三日、泉涌寺積学寮にて、「雑抄 下」を校合（『醍二七三―一四』）。

・正安四年（一一三〇）七月十八日、泉涌寺積学寮にて、明恵の著作「華嚴唯心義」を書写（『醍一四八一―一〇一二』）。



- ・正安四年（一三〇二）十月六日、泉涌寺にて、「灌頂最秘口決」を書写（『醍』四四四―二七）。
- ・正安四年（一三〇二）十月六日、泉涌寺にて、「第三重作法」を書写（『醍』一三〇二）。
- ・乾元二年（一三〇三）六月二十一日、泉涌寺にて、覚一の本を賜って、「入曼荼羅抄」を書写（『東寺観智院金剛藏聖教』六二箱四）。
- ・嘉元元年（一三〇三）十月十七日、泉涌寺知客寮にて、「秘密集 下」を書写（『醍』四一〇―一八一）。
- ・嘉元三年（一三〇五）九月三日、泉涌寺一如寮にて、「秘鈔」を書写（『醍』二七二―一一）。
- ・徳治二年（一三〇七）二月十六日、泉涌寺にて、「勝覚伝法灌頂記」を書写（『醍』四四六―一）。
- ・応長元年（一三二一）七月二十四日、泉涌寺一如寮にて、「三宝院流 諸尊伝受口決抄 下」を書写（『醍』三五六―八一）。
- ・正和元年（一三二二）十一月二十二日、泉涌寺にて、「秘抄口決 第十三」を書写（『醍』三六五―一四）。
- ・正和二年（一三二三）二月十三日、泉涌寺にて、「秘抄口決 第四并第五」を書写（『醍』三六五―一五）。
- ・正和二年（一三二三）四月二十二日、泉涌寺にて、一円上人の本を以って「灌頂式伝受口決 下」を書写（『醍』四二四―三九）。
- ・正和二年（一三二三）七月十二日、泉涌寺にて、「三宝院伝受口決抄」を書写（『醍』三五六―一一）。
- ・正和二年（一三二三）七月十二日、泉涌寺にて、「秘鈔口伝（塔）」を書写（『真福寺善本目録』）。
- ・文保二年（一三二八）七月二十七日、泉涌寺にて、「六字法」を書写（『醍』六三五―二九）。

これらから、一二九九年から一三一八年にかけて、秀源が泉涌寺を拠点に活動していたことがわかる。この時期は、秀源の三十二歳から五十一歳に相当し、若年のころの醍醐寺における真言修学期と、壮年・晩年の上醍醐での再活動期との、ほぼ中間におさまるものである。よって、して学んでいったと考えられる。

先に列挙した中に見えているように、秀源は、正安四年（一三〇二）に明恵の著作を書写しており、遁世への志向がうかがわれる。また、元亨元年（一三二一）には西大寺本照上人（性瑜）の著作を書写しており（『調支分作法』『醍』四〇六―六一）、律への関心も確かめられる。

そして何よりも、しばしば律僧であり泉涌寺長老であった覚一覚阿の聖教を借覧し書写をおこなっていることから、秀源は覚一の弟子となり律を伝授されたものと推定される。秀源が泉涌寺にて書写した聖教は、主として三宝院流の灌頂・諸尊法に関わるものであるが、これは真言寺院に伝わった聖教の奥書に拠っているためで、実際には真言と律を含めた法流の全てを伝授されたものと思われる。

秀源が泉涌寺の人々と律僧と親しく交流していたことは、次に掲げる「教授作法」（『醍』四二九―一）の奥書に明らかである。

弘安九年九月一日、以中観上人本交合之并／裏書注等書加之了、賢爾／正中二年八月十二日、於牛玉寺御本書写了／一交了、求法金剛資秀源／嘉暦四年（己／巳）卯月廿一日、賜御本書写交合了／金剛仏子幸禪／観応二年二月十七日、於勢州聖衆寺以御本／書写交合了、清浄金剛子聖臯（生二／十八）

右によれば、まず弘安九年（一二八六）に中観上人（広隆寺桂宮院の澄禪。叡尊の弟子）所持本によって賢爾が校合・加筆をおこなっている。賢爾は、一円上人もしくは八坂上人と呼ばれ、京都八坂に住し、醍醐三

宝院流のうち道教の法流（地藏院流）を相承した人物で、その流れは、のちに文海にも受け継がれている（「伝法灌頂師資相承血脉」、「成賢以來文海一円上人方相承血脉写」『醒』八三―四三三）。律僧である中観上人澄禅に師事し、みずからも上人と呼ばれていることから、賢爾もまた律を学んだ真言僧であったと思われる。

秀源は、賢爾から学ぶところも多かったようで、先に掲げた泉涌寺での書写活動のなかにも、賢爾の本を書写した事例が二件見えている。さて、右の史料に話を戻すと、秀源は、賢爾が手を加えた本を正中二年（一三二五）に牛玉寺<sup>12</sup>にて書写している。

続いて、秀源の書写本を幸禅なる僧が嘉暦四年（一三二九）に書写し、それをさらに観応二年（一三五二）に、聖皇が伊勢聖衆寺において書写しているのが、幸禅は聖衆寺の僧であったと思われる。時代はかなり下るが、戦国時代の享祿二年（一五二九）に、伊勢聖衆寺から出た乗覚照範が泉涌寺第六五世長老となつて、同寺は泉涌寺系の律寺であったと思われる。ちなみに、同寺は、現在は真言宗醍醐派の寺院として三重県桑名市北別所に存在している。

そして、観応二年（一三五二）に幸禅書写本を書写した聖皇こそが、のちに泉涌寺第二一世長老となる竹岩聖皇である。

このように、真言系の律僧の聖教を秀源が書写し、その書写本は泉涌寺関係者の間で相承され、めぐりめぐって醍醐寺の聖教として現在に伝来しているのである。右の聖教奥書は、秀源が泉涌寺と醍醐寺を結ぶ存在であったことを象徴しているものと言えよう。

### 三 竹園院と小田原寺

秀源が泉涌寺に活動拠点を持つ律僧でもあったことを裏付ける記述が、秀源が泉涌寺で書写した「具支灌頂式血脉」（『醒』二九六―三五五）

の伝領奥書の中に見いだせる。すなわち、「竹園院長老証円上人自筆也」というものである。

証円上人とは言うまでもなく秀源のことであり、彼が竹園院の長老であったという。近世の編纂物であるが『泉涌寺維那私記』の泉涌寺七世「無心覚阿律師」（覚一）の項には、「竹園院開山」とあり、覚一と秀源の密接な関係から、覚一の開いた竹園院（竹園院）を秀源が引き継いで二世長老となつたのであろう。

竹園院の開創がいつのことであるかは定かでないが、『高野山正智院聖教』第十三箱18「瑜伽瑜祇理供養私記（興然記）」には、次のような奥書が記されている。

建治元年（乙亥）八月十三日辛亥（辟宿／水曜）、於鎌倉二階堂御房、伝授了、覚阿（生 年／三十九）／正安二年（庚子）十月九日、於洛陽東山竹園寺、伝授了、玄海（生年三十四）

これにより、正安二年（一三〇〇）に京都東山の竹園寺で、覚阿（覚一）の聖教が、玄海なる人物に伝授されることがわかる。おそらく、この「竹園寺」は覚一が開いた竹園院のことと思われ、正安二年以前には創立されていたことになる。さらに、「大青面金剛法護摩次第」（『醒』四三九―一〇三）の奥書には、「徳治二年（丁／未）（一三〇七）五月十一日、於洛陽泉涌寺邊竹園寺東寮、申剋以暗／眼風病身為興隆書写畢／玄襄（五十八／四十三）」とあって、この竹園寺が竹園院と同一であれば、竹園寺は泉涌寺辺にあつたことになる。

ほかにも、『延文四年記』七月二十日条の「夜戌刻、泉涌寺竹園院焼失了」という記事や、『看聞日記』嘉吉元年（一四四二）六月五日条の「泉涌寺之竹園院」という記事が存在することから、竹園院は泉涌寺の塔頭であったと考えられる。

また、南北朝期ごろ作成の『東山泉涌律寺図』（泉涌寺蔵）において、

伽藍の西北に「知久遠院」が描きこまれており、これが竹園院のことではないかと思われる。

『泉涌寺維那私記』によれば、室町後期の文明ごろの泉涌寺長老のうち、第四三世養国聖安と第四六世拙心苾苾安は竹園院の出身とされている。さらに、元龜二年（一五七二）二月二十日「泉涌寺山林法度条々」（『泉涌寺文書』一三三三）において、連署者の一人として「竹園院」が見えており、天正十三年（一五八五）十二月「泉涌寺諸塔頭并門徒衆檢地目録」（『泉涌寺文書』一三七七）および同年同月「泉涌寺諸塔頭并末寺衆指出帳写」（『泉涌寺文書』一八四四）においても、「竹園院」分として「七石九斗式升」が計上されている。よって、室町時代後期には、泉涌寺塔頭の一つとして竹園院が存在していたことは確かである。なお、元禄五年の「泉涌寺派寺院本末改帳写」（『泉涌寺文書』二二二二）では、その名が見えないことから、近世初頭には廃絶したものと思われる。

さて、秀源本人と竹園院の関係であるが、同所にて聖教を書写した事例が確認できる。「開心秘決」（『東寺観智院金剛藏聖教』五一箱六）奥書によれば、秀源は同書の第四卷「諸菩薩」を、元亨四年（一三二四）十月七日に「竹苑院」にて書写している。また、同日に「十八章建立」（『真福寺善本目録』）という聖教を同じく「竹苑院」にて書写したことが知られる。この「竹苑院」は、竹園院のこととみなしてよいであろう。そのほか、正安三年（一三〇一）十一月十四日に秀源が泉涌寺にて覚一本の本を以って校合した「三宝院伝法灌頂私記」を、観応元年（一三五〇）五月二十八日に全兼という僧が「竹園院南面」にて書写したという事例がある（『醒』一五四―八）。秀源の関わった聖教が竹園院に伝えられていた可能性があり、秀源が竹園院長老を務めたことの傍証となるであろう。

以上より、秀源が泉涌寺塔頭の竹園院の長老を務めたことは事実で

あったと考えられる。その時期については不明であるが、竹園院開山とされる覚一の没年が延慶元年（一三〇八）前後とみられ、秀源が泉涌寺にてもっとも精力的に聖教書写を行っていた時期が正和二年（一三二一）ごろであることから、おおよそ一三二〇年前後に想定されよう。

ところで、ここまで秀源の主たる活動拠点が醍醐寺と泉涌寺にあったことを明らかにしてきたが、一つの疑問が残されている。それは、彼がなぜ「小田原証円上人」（『伝法灌頂師資相承血脉』・「小田原上人証円」（『醒』五〇九―二五一一））などのように、「小田原」を冠して呼ばれるのか、ということである。

この疑問に対しては、「伝法灌頂三昧耶戒作法」（『醒』四八五―四七一三）の奥書に、「元徳三年十二月廿六日書写、所持本去八月焼失之時／於小田原寺焼了、仍重得勘得書之／金剛仏子秀源（六十／六）」とあることが、解答への糸口になる。すなわち、秀源の所持していた書物が、元徳三年（一三三一）八月の「小田原寺」の火災にて焼失したというのである。この記述から、元徳三年当時、秀源は小田原寺に住していたことがわかる。

また、秀源が正応六年（一二九三）に書写した「無常導師作法」（『東寺観智院金剛藏聖教』一四五箱二五）を、康永二年（一三四三）に崇恵という僧が小田原寺で書写している。秀源の書写本が、小田原寺に伝来していたと思われるのである。

以上のことから、秀源が「小田原」と称されたのは、小田原寺に住していたことがあったからである、との回答を得ることができる。しかし、この小田原寺とは、いったいどの寺院であろうか。京都周辺で「小田原」という名称を持つ寺院としては、南山城の西小田原寺（浄瑠璃寺）・東小田原寺（随願寺）や、高野山の小田原谷が想起される。しかし、いずれも浄土系の聖の活動拠点という性格が強く、これまで見てきた秀源

の活動との接点も見出しにくい。

この点に関しては、次に掲げる「許可作法次第」(『真福寺善本目録』)奥書がヒントになる。

正安元年六月十二日、於泉涌寺、以一円上人御本書写了、金剛仏子秀源／交点了／嘉暦四年五月十日、於東山小田原寂靜院、以方丈(秀源)御本書写了／金剛仏子崇空

正安元年(一二九九)に、一円上人(八坂上人・賢爾)の本を秀源が書写し、嘉暦四年(一三二九)に、崇空が「東山小田原寂靜院」において、同院の方丈であるところの秀源の書写本をさらに書写した、ということである。

右の奥書より、嘉暦四年(一三二九)の時点で、京都東山の小田原寂靜院に秀源が方丈として住していたことがわかる。先に、秀源が小田原寺に在ったと推定した元徳三年(一一三三)とも、きわめて近接する年代である。したがって、秀源が拠点とした小田原寺とは、京都東山の小田原寺であり、寂靜院という名称を持つ寺院であったと思われる。

この東山小田原寺と同一の寺院と考えられるのが、「清水坂東小田原寺」である。元亨三年(一一三三)に、貞譽という僧が同所で「肝要抄卷第二」(『東寺観智院金剛藏聖教』六一箱三一二)の書写を行なっている。この貞譽は、元応二年(一一三〇)には、「清水坂小田原寺」において、「八坂上人」の本を賜って書写をしている(『諸尊法私記 卷第十七』『東寺観智院金剛藏聖教』六五箱一―一六)。

八坂上人とは一円上人(賢爾)のことであり、京都の八坂に住したという。賢爾は徳治二年(一一三〇七)に「清水坂」にて聖教書写をおこなっており(『開心秘決 第七』『真福寺善本目録』)、同書を元亨四年(一一三二四)に他ならぬ秀源が、書写・校合しているのである。これらのことから、賢爾が拠点とした「八坂」とは、清水坂の小田原寺のことと考え

られる。

先に述べたように、賢爾は醍醐寺の真言と律とをともに学んだ人物で、同様の立場にあった秀源は、彼の聖教をしばしば書写している。秀源は賢爾のあとを継いで、一時期清水坂の小田原寺の長老を務め、そのため「小田原上人」と呼ばれるようになったのではなからうか。その時期は、泉涌寺竹園院での活動時期の少し後となる一三三〇年前後、と想定される。

おわりに

鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて活躍した秀源(証円上人)は、上醍醐・泉涌寺竹園院・清水坂小田原寺、そして再び上醍醐と、その活動拠点を変えつつ、精力的に真言聖教の書写をおこない、後世に醍醐流の法流を伝えた人物であった。彼は、証円上人と呼ばれたことや泉涌寺の覚一が開いた竹園院の長老となったことから判明するように、遁世の律僧でもあり、醍醐の法流を泉涌寺などの京都東山周辺の律寺に伝える役割を果たしたのである。逆に、彼が泉涌寺において集積・相承した真言の聖教は、上醍醐に伝えられている。鎌倉時代にはすでに、真言・律兼学の僧侶によって、京都の東に位置する醍醐寺と泉涌寺とのあいだに密接な交流<sup>15)</sup>がみられたのである。とりわけ、上醍醐は、遁世の僧たちが多く出入りして多彩な真言教学の修学がおこなわれた、特色のある空間であったと言えよう。

〔註〕

- (1) 俊苒については、総本山御寺泉涌寺編『泉涌寺史 本文篇』(法蔵館、一九八四年)、上村貞郎編『御寺泉涌寺と開山月輪大師』(泉涌寺、二〇一一年)参照。



(2) 西谷功『南宋・鎌倉仏教文化史論』（勉誠出版、二〇一八年）口絵4に  
おける堂宇比定を参照。

(3) 長典については、西谷功『視覃雜記』著者「長典」と醍醐寺建久本「十  
巻抄」所持者「長典」―中世後期における「兼学僧」の「実態」（『智山  
学報』六四輯、二〇一五年）、大谷由香『中世後期 泉涌寺の研究』（法  
藏館、二〇一七年）、藤井雅子『中世醍醐寺における他寺僧の受容』（『日  
本女子大学紀要 文学部』六六号、二〇一七年）を参照。

(4) 築島裕「醍醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脉」」（『醍醐寺文化財研究所  
研究紀要』一号、一九七八年）による。

(5) 上醍醐の谷と院家については、山岸常人「上醍醐寺総画図と上醍醐の  
院家の遺跡」（『中世寺院の僧団・法会・文書』東京大学出版会、  
二〇〇四年）。

(6) 中世の史料に、「上醍醐寺丈六堂」（『醍』三三二―三三六）と見えている。  
また、「醍醐山寂靜院丈六堂房」で実西が聖教書写をしたり（『醍』  
三七五―三八〇）、「丈六堂坊」で真源が聖教書写をしたり（『醍』三六七―  
一三三）していることから、秀源が相承した法流（照阿院流）の先師たち  
の房が存在した堂であり、上醍醐の寂靜院谷にあったことがわかる。寛  
永二年（一二二五）の「醍醐寺寺領目録案」（『醍』五一―六三）『大日本古  
文書 醍醐寺文書之三』六二九）では、山上学侶分として「丈六堂」  
十五石が計上されているが、堂衆らしき兩名に分配されていることから、  
近世初頭には堂舎は廃絶し、名跡のみが残されていたとみられる。

(7) 「奉行僧」は醍醐の公的行事に携わり、もっぱら醍醐寺にて活動する立  
場と思われる、他寺との関係が深く通世の性格が強い、本稿で考察の対象  
としている秀源と、この奉行僧「秀源」とが同一人物かどうかは、若干  
の疑念が残る。

(8) この「天慶布字印信」とは、真言教学の上で重要な位置を占めた平安  
中期の名僧・石山内供淳祐の天慶九年の印信のことと思われる。

(9) 『大日本古文書』では「証円上人」としているが、「証円」の誤植である。

(10) 宇都宮啓吾「智積院聖教における「東山」関係資料について―智積院  
蔵『醍醐祖師聞書』を手懸かりとして―」（『智山学報』六五号、

二〇一六年）による。

(11) 文保二年の書写者が秀源とは明記されていないが、続く奥書に元徳二  
年に弟子の文海が「小田原上人御本」を以って書写したとあるので、先  
の書写が秀源のものであることは確実である。

(12) 牛玉寺については、詳しいことは不明である。

(13) 覚一の竹園院開創については、『律苑僧宝伝 卷第十四』の「泉涌寺覚  
一阿律師伝」では確認できない。

(14) 註2に同じ。

(15) 寺院間の交流には、寺家・院家・寺僧などのさまざまなレベルの交流  
が想定されうるが、本事例においては基本的には寺僧レベルの交流のみ  
に限られる。ただし、いったん醍醐を離れ泉涌寺に拠点を移した秀源が  
再び上醍醐で活動していることから、寺家のレベルにおいても泉涌寺僧  
との交流がある程度許容されていたものと考えられる。

【付記】 本稿は、東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点の二〇一  
五年度一般共同研究「醍醐寺聖教における泉涌寺関係史料の基  
礎的研究」（研究代表者・藤井雅子）の成果の一部である。